

フランス第三共和国初期における 中等教育制度の近代化過程についての一考察

宮 脇 陽 三

内容目次

はじめに

一 フェリ文相による国公立中等学校の改革

二 ブルジョワ文相による国公立中等学校の改革

三 国公立中等学校専科課程の成立と発展

(一) デュルユイ文相による専科中等教育の創設

(二) フェリ文相の改革

(三) ゴブレ文相の改革

(四) ブルジョワ文相の改革

四 国会リボ委員会による中等学校教育調査

五 私立中等学校

六 教会立中等学校

七 私立新教育中等学校

おわりに

はじめに

一九世紀フランス教育史において中等教育 (enseignement second-

aire) は、つねに重要な地位を占めていた。なぜならフランス社会の指導者階層である自由職業者、法律家、医師、大学教授、高級官僚などを志望する者にとって、中等教育は階層移動の可能な唯一つの経路であったからである。したがって「中等」ということばには、社会の上層階級に直結しているという意味が含まれていたのである。

中等教育が教育の機会均等と門戸開放のための近代化を精力的に推進してくるようになるのは、フランス第三共和国体制が発足する一八八〇年代以降である。

この小論では、(一)国公立中等学校の教育の近代化をめぐって、一八八〇年代のフェリ文相による改革と、一八九〇年代のブルジョワ文相による改革において、何が問題とされたのか、その問題はフランスの社会状況とどのように関連していたのか、また(二)ドイツの実科学校のフランス版である専科中等教育が、なぜフランスでは二五年間で消滅してしまい、職業教育校ではなくて、一般教養教育校として吸収され

たのか、さらに(三)当代の私立・教会立中等学校は国公立中等学校の競争相手校として発展していくことができたかどうか、最後に四一九世紀末期からフランスに登場してきた新教育中等学校や新興の教育学が、フランス社会にどのように受けとめられ、どのような反響を起そうとしたかについて考察しようとするものである。

一 フェリ文相による国公立中等学校の改革

一八七九年二月四日に大革命時代の教育立法家コンドルセの忠実な弟子であるフェリ(Ferry, J., 1832-1893, 文相在任一八七九年二月四日から一八八一年十一月三日まで、同一八八二年一月三〇日から同八月六日まで)文相の登場は、シモン(Simon, J., 1814-1896, 文相在任一八七〇年九月四日から一八七三年五月一七日まで)文相の教育政策への復帰を示している。

一八〇二年以後、フランスの中等学校教師は文部大臣または公教育高等評議会の決定事項に服従してきた。一八八〇年以後になって、共和主義精神の影響によって、学校現場の教師の意見が公教育高等評議会に反映できるようになった。シモン文相は在任中に公教育高等評議会に学校現場の教師の声が反映できるような措置を取っていたのであるが、ブロリ(Brogie)議員の圧力によって、国民議会に対して一八五〇年の保守反動時代の空気を反映した、教育界に直接のかかわりあいを持たない人を公教育高等評議会の委員として承認を求めることをよぎなくされたのである。

フェリ文相は、一八八〇年二月二七日の法律によって、公教育高等

評議会に、学者団体代表委員のほかに、「全段階の公教育教師代表」(3,170)を加えて、公教育界全体の声が反映する措置を取った。

学校教師は、公教育高等評議会の委員選挙にあたって、大きな関心を持っていたので、棄権者はほとんど居なかった。国立中等学校(リセ)の教授資格教師(アグレジェ・アンセニアン)の六二五人は中等学校教育の改革派に投票し、またその一九八人は現状維持の保守派に投票した。文法担当教授資格教師は中等学校教育の伝統を知的かつ合理的に尊重する候補者を支持したのに対して、文学担当教授資格教師は中等学校教育の改革を積極的に推進していたモレル(Morel, G.)を支持した。

フェリ文相は公教育高等評議会の会長に就任し、公教育高等評議会の威信を高めることになった。フェリー文相の中等学校教育行政の企画と遂行にあたる協力者は、文部省中等教育局長ゼボル(Zévolé)とパリ大学区総長グレアル(Gréard, O., 1828-1904)であった。

公教育高等評議会は、一八八〇年八月二日に国公立中等学校の新教育課程を編成した。国公立古典系中等学校の週当り授業時間割表ならびに教科別の週当り総授業時数は、「第1表」と「第2表」(11, 511)に示す通りである。

この新教育課程の性格は、シモン文相の一八七二年九月二日の通達の方針を承継していた。それは文学と科学(数学・理科)の緊密な調和を図るということである。それは、かつてデュルユ(Duruy, V., 1811-1894)が「調和のとれた教育」(4, 143)と云ったこと、知識の全体を対象として、あらゆる教科の教養の同等性に基づいた教育

〔第1表〕 国公立古典系中等学校の週当り授業時間割表
(1880年8月2日省令)

教 科	学 級							合 計
	第6	第5	第4	第3	第2	修辞学	哲学	
国 語	3	3	3	3	4	5		21
ラ テ ン 語	10	10	6	5	4	4		39
ギ リ シ ヤ 語			6	5	5	4		20
現 代 外 国 語	3	3	2	3	3	3	1	18
科学(数学・理科)	3	4	3	3	3	3	9	28
歴 史 ・ 地 理	3	3	3	4	4	4	3	24
図 画	2	2	2	2	2	2	2	14
哲 学							8	8
合 計	24	25	25	25	25	25	23	172

を実現しようとした方針の延長につながるものである。それまで「科学」は自由であるがゆえに、長期間にわたって保守的勢力から疑惑の眼を向けられていたのであるが、ようやく科学は「知的、経済的および社会的な三つの使命を帯びている」(1,341—342)と認められるようになったのである。

〔第2表〕 国公立古典系中等学校の教科別週当り総授業時数
(1880年8月2日省令)

教 科	初等科を含む 国立中等学校	第6学級以上だけの 国公立中等学校
国 語	51(時間)	21(時間)
ラ テ ン 語	39	39
ギ リ シ ヤ 語	20	20
現 代 外 国 語	33	18
科学(数学・理科)	38	28
歴 史 ・ 地 理	36	24
図 画	14	14
哲 学	8	8
合 計	239	172

一八八〇年八月二日の新教育課程によって、ラテン語授業は第六学級以降、またギリシャ語授業も第四学級以降でのみ開始されることになった。この改革は、教育の機会均等という理念によって、小学校から公立中等学校(コレージュ)への進学率を向上させるというねらいと、ギリシャ語授業は第四学級以降から始めても差しつかえはないのではないかという純粋に教育的な見地から行われたのである。

ラテン詩は消滅し、仏文ラテン語訳は重要性を失い、ラテン語仏訳は国語講読に名誉ある地位を譲った。ラテン語とギリシャ語から解放された授業時間は、主として「物理学および博物学」(5,316)に配当

された。

第七學級、第四學級、修辭學級の各學級で完結する三カ年ごとの三期間履修制度は、生徒がそれぞれの時期にまとまりのある知識を習得して、中等学校の初級、中級、上級の各段階ごとに修了できるようにしたのである。

フェリ文相は、一八八〇年のラテン語演説会の最後の表彰式に出席し、それまで国公立の中等学校に君臨してきたラテン語授業の削減に満足の意を表明し、国公立中等学校教育関係者の英断に敬意を表した。

このような中等教育の近代化の推進に対して、公教育高等評議会は急進的な改革案に対して慎重な態度を示した。公教育高等評議会は、つねに穩健中正の態度を堅持しており、また「極端な意見の中庸でありたつ」(3,172)という立場から、すべての人びとを完全に満足させることはできないのではないかと考えていた。教育史は、改革を推進するために、現状の弊害を批判しながらも、一部の改革者が極端に急進的な革命へ突進していくことを警戒する改革者が出てくる例をししばし示すことがある。この場合には、ブレアル(Bréal, M., 1832-1915)がラテン語授業を六年、ギリシャ語授業を四年に短縮するのは危険であると考えたのである。

文部省内での改革派のベル(Bert, P.)もまたラテン語・ギリシャ語古典人文科教育の有力な支持者であった。かれの教育観によれば、中等教育は生徒の魂の中へ高尚な目的のために自己を学問に捧げる熱望を点火させなければならない。美を崇拜し、無用を尊重し、理想を愛好する精神を青少年に育成することは必要であり、それは文学教養

によってのみ行われるのである。文学教育のみが生徒に対して、真理を認識し楽しみ、また悲しむという純粹な満足のために、学習し反省し感動する高雅な没我を与えることができるというのである。

新聞記者フェルスヌユ(Ferneuil)も有名な教育評論家であったが、フェリ文相から意見を求められた時、国公立中等学校教育関係者は、近代化のための改革にあまり熱心に取り組んでいないと非難している。

ボワシエ(Boissac)は中庸の立場の意見の代表者である。かれは、シモン文相が着手した近代課程中等教育と古典課程中等教育を同格のものにするという措置は、フランス中等教育の現状を維持できなくしてしまうのではないかと考えたのである。

かれによれば、いかにも国語教育の強化は、生き生きした口頭の説明によって、中等学校の教室の中に活気をよみがえらせて、退屈を追い払ってしまうかもしれない。しかし他方ではラテン語授業はぱっさり削減されてしまっている。どのような事情があるにせよ、ラテン語授業時間はいずれ削減されるようになるだろう。それはともかくとして、中等教育の改革の成否は、学校現場の一人ひとりの教師の才能と熱意にかかっている。いずれにせよ、改革にともなう利点の方は確かなものではないのに、損失の方ははっきりとしているのである。

それでは改革をどのように進めていけばよいのか。フランス中等教育の現状に行きづまりが出てきている以上、とにかく過去の栄光のきずなから中等教育を解放することが必要である。もちろんそうすれば、いかなる改革者といえども、多少の気がかりが残るのはやむをえない

としても、とにかく断行するよりほかはないのである。

いづれにせよ、改革にあたって、改革を命令することの方が、改革を実際に遂行していくことよりも容易である。一八八〇年八月二日の新教育課程の実施にあたって、なによりも学校現場の教師による毎日の授業実践の中で、改革の趣旨の徹底が必要であつた。しかし、それはフランスの個人主義にあまり馴染まないことであつた。

文法と文学の担当教師はラテン語の優位をしぶしぶ放棄した。歴史と地理の担当教師は第六学級と第五学級へ進出したが、その地位を固めることに腐心していた。物理学と博物学の担当教師は授業時間の余りを埋め合わせるために過大な知識の暗記だけを生徒に強制していると非難された。

デュボ (Duvau, J.) 文相在任一八八二年八月七日から一八八三年二月二日まで、文相は、一八八二年に中等教育のそのような状況を改善するために努力したが、実効を見るに至らなかった。一八八四年に公教育高等評議会の委員の改選が行われたが、科学教育の偏重を是正し、古典語教育の復活を図るという立場の委員が選出された。

一八八五年の中等学校教育課程の一部改定によって、授業時間は週当り二〇時間となり、四ないし五時間削減された。第七学級でのラテン語授業の復活は実現しなかったが、ギリシャ語授業は一年繰り下げられて、第五学級から始められることになった。さらに第六学級と第五学級の地理・歴史の授業時間は、文法担当教師に戻されることになった。これらの措置によって、古典教養教育と近代教養教育との調整が図られ、いくらかの安定が回復されたのである。

しかし、その安定状態も長くは続かなかった。大学入学資格試験制度の調査を目的とするシモン委員会が、一八八八年に発足したが、シモン委員長は、大学入学資格試験制度の改革にからめて、中等教育の懸案も同時に解決したいと考えていたのである。

二 ブルジョワ文相による 国公立中等学校の改革

一八九〇年に公教育高等評議会は国公立中等学校のエデュカシヨンを改定した。ブルジョワ (Bourgeois, L., 1851-1925) (文相在任一八九〇年三月一七日から一八九二年二月五日まで、同一八九八年六月二日から一〇月三十一日まで) 文相は、一八九〇年五月二日に国公立中等学校教師に対して、中等学校教育改革の基本方針を傳達した。

「本官は、公教育高等評議会が管轄している教育事業は、二つの一般的教育方針によって規制されており、また総括されると思う。

知育の観点からみれば、教材を生徒の消化力に的確に適應させるようにすること、知識の詰めこみよりも、むしろ精神の陶冶のために、教材を簡素化し調整し適正に配列することが必要である。

訓育と徳育の観点からみれば、(一)それぞれの中等学校の訓育力を統一し相互に連帯させること、(二)体罰の数と厳しさを身体の安全からみて妥当な程度まで軽減し、各教師自身の權威によって強化すること、(三)児童生徒が自発的に服従するものを、厳罰に対する恐怖心からではなくて、健全な精神の土台である自発的な義務感によって育成していくことなどが必要である。これは、われわれが青少年を自由な品性を

もった人間に陶冶していくことのできる、最も正しい多産的な教育原理である」(5, 324)。

かれは、この通達の方針にしたがって、一八八六年に中等学校教育課程を改定し、暗記中心または知識詰めこみ中心の教科の一部の教材を削減し、簡素化を図った。ブルジョワ文相による一八九〇年六月一二日の省令による国公立古典系中等学校における第六学級から哲学級までの七カ年の修学期間での各教科の週当り総授業時数は、〔第3表〕(11, 511) に示す通りである。なお週当り授業時数からみた各教科の重要度は、〔第1図〕に示す通りである。

第二学級と修辞学級における週当り授業時数二五時間から二〇時間まで五時間の授業時数の削減は、主として実験・実習関係の教科の授業時数の削減によって行われたから、実際にはそれによって浮いた授業時数を古典人文科に配当するという措置が取られたのである。したがって授業時数の削減はギリシャ語・ラテン語古典科にはまったく関係なかったのであり、むしろギリシャ語仏訳とラテン語仏訳が復活したことからみても、新教育課程は、古典教育擁護派からの巻き返しが成功したと考えられるのである。

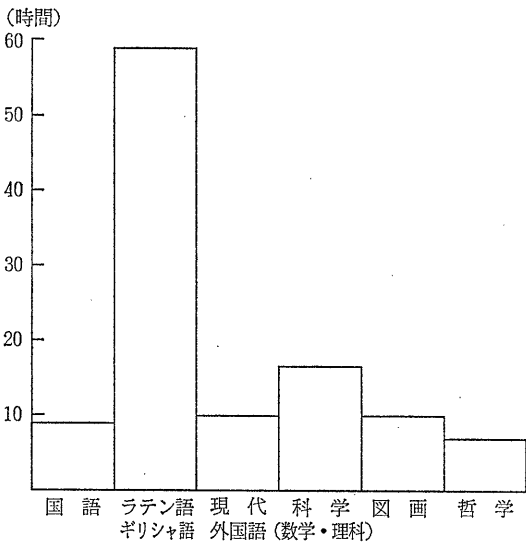
そうは言っても、一八八〇年の教育課程改革の基本理念は承け継がれており、近代課程に属する教科の担当教師は、新興の教育学の成果を積極的に取り入れて、十年一日のような単調なくり返しだけの授業から脱却しなければやっていけないようになってきていたのである。

ブルジョワ文相による教育課程の近代化の一つとして「体育」(5, 316) を採択したことがあげられる。体育科の指導目標はスポーツと

〔第3表〕 国公立中等学校における全学級を合わせた各教科別の週当り総授業時数

教 科	全学級を合わせた週当り総授業時数
国 語	18
ラテン語・ギリシャ語	59
現 代 外 国 語	10
歴 史 ・ 地 理	17¼
科 学 (数学・理科)	16½
図 画	10
哲 学	6¾
合 計	137½

(1890年6月2日省令による)



〔第1図〕 国公立中等学校教育課程における週当り授業時数からみた各教科の重要度

(1890年6月12日省令)

体操の振興を図るというよりも、むしろ生徒を知育偏重と大学入学資格試験の受験準備教育による身体の過労から保護することにあつた。

当代の中等学校では体育の重要性がようやく認識されるようになっていた。しかし体育を学校の中へ導入する初期の段階では、体育は生徒の疲労を大きくするという理由から消極派の方が体育支持の積極派よりも圧倒的に多かったのである。

一八八六年に医学学士院は、中等学校生徒の学習活動にともなう過労問題について審議することになった。衛生学者は中等学校の過密な授業時間が生徒の疲労増大の原因であると指摘した。しかし学校現場の教師は、過労になることを口実として体育やスポーツを避けるような生徒は、おうむね怠け者の生徒に多いことを知っていたのである。なぜなら実際に大学入学資格試験を目ざしている学業成績が中位以上の生徒の場合には、学習活動の負担過重でへとへと状態になっている者は、ほとんど見受けられなかったからである。

体育・スポーツ支持者は英国のパブリックスクールでの体育による紳士養成の実例を紹介した。クーベルタン (Coubertin, P., 1863—1937) は、一八八七年に体育振興のための活動を開始した。シモン元文相が一八八八年に学校体育普及会の会長に就任した。ダリ (Darl, P.) は一八八九年に国民体育連盟を設置し、間もなくそれはフランス体育スポーツ協会連盟へと発展して行った。

このような民間体育運動が盛んになるにつれて、国公立中等学校も体育に取り組むようになった。当初では、体育に熱心な校長や教師は、スポーツクラブの結成を奨励した。過度な体育による過労を懸念する

中等学校では、体育活動は生徒にとって無理な負担にならない程度で漸進的に取り入れられた。

かくして当代の中等学校教育は、これまでの全国的学力競争試験における少数の知的優等生養成方針から、生徒全員の学力や体力の水準の向上を目ざす方向へ、コペルニクスの転回を開始したのである。

訓育面では、これまでとかくの問題をひき起していた寄宿舎は、多くの非難にもかかわらず存続することになった。寄宿舎問題は舎監と寮生^{カモイ}の人間関係から発生することが多かった。そこで舎監の人間の資質の向上を図るために、舎監を兼ねている復習教師(レベティール)の物質的、精神的な待遇を改善することになったのである。これまで教会立中等学校の聖職者身分の教師は、競争意識もあって、国公立中等学校の寄宿舎において生徒の訓育を担当する世俗者身分の復習教師の言葉使いや日常生活での品行をとりあげて非難することが多く、そのことが復習教師の世間的な評価を低下させることになっていたのである。

しかし一八八七年と一八九一年の復習教師の待遇改善の法令は、復習教師の新時代の幕明けとなった。これまで復習教師は学士号取得者でありながら、寄宿舎での復習教師という職務上の制約から、教授職に昇進するための自由な学習時間とゆとりに恵まれていなかったのであるが、今後は生徒に対する生活指導に明け暮れる多忙な生活からいくらか解放されることになったのである。

当代の国公立中等学校の教員募集は順調であった。国公立大学・中等学校教授資格試験(アグレガション)は高度な学問水準を維持しつ

づけていた。永い眠りから覚めたばかりの大学の文学部と理学部は、これまではたんに中等学校教師志望の大学入学資格学位取得者を文学士か理学士に養成しただけであった。

しかし社会は国公立中等学校教師に対して、たんに学術上の識見や技能だけではなくて、道徳的資質を深めることも求めるようになってきたのである。中等学校教師にはたんに学習指導能力だけではなくて、生徒指導力も必要になってきたのである。中等教育の近代化は、学力競争試験での英雄や強者の養成だけでなく、学級のすべての生徒の学力と体力と徳性の育成を配慮する必要があることを促進したのである。

とりわけ訓育面では、罰としての強制課業や外出禁止、謹慎処分、体罰は禁止されることになった。訓育は体罰への恐怖心からではなくて、生徒自身の道徳的義務感情に訴えて行われるようになった。

当代の教育学者ギョー (Guyau, M., 1854—1888) (2, 24) によれば、教育に欠くことのできない権威は、(一)愛情と道徳的尊敬か、(二)実用から生じた服従の習慣か、(三)恐怖心かのいずれから生じてくるのであるが、教師が児童生徒に対して十分な愛情を注いでいけば、体罰はしなくてもよくなるというのである。なぜなら愛は愛を生むからである。

そのうえ道徳的義務感情は各人の神経組織が相互に意識的にせよ、無意識的にせよ、直接に作用しあって生じてくるのである。道徳的義務感情は人びとの連帯性という深い感情に根ざしている。道徳的義務感情を持つということは、他人に対する義務を遂行し、他人と結合し、

他人との共同責任を負担することであるというのである。

ギョーのこのような訓育観は、パリ大学教育学担当教授マリオン (Marion, H.) によっても支持された。当代では教育学は世人の注目をしだいに集めるようになってきていた。出版界でも教育関係書の出版部数が、ようやく養蚕関係書のそれを上回るようになってきていた。ブルジョワ文相は、一八九〇年の訓育についての訓令の案文を起草することを、マリオンに委嘱した。マリオンは、生徒の訓育にあたっては、愛情でもって生徒を取り扱い、生徒が自ら道徳的良心に目覚めていくように図っていくことが大切であると主張した。

しかし当代の大多数の中等学校教師は、お人好しの大学教授の訓育観は中等学校の現場の実情にうといものであり、強制的手段をもたない訓育はほとんど実際的な効果をあげることがむずかしいと考えていたのである。けれども教育学者マリオンは、教師の愛情によって生徒の道徳性の内面化を図っていくための前提条件として、(一)一校当りの生徒数を五〇〇人以下とすること、(二)厳格な進級試験によって怠け者の生徒をふるい落とすことをあげていたのである。したがって学校現場で、この二つの条件が満たされていない場合には、それはただの教育理想論にとどまらざるをえなかったということができるのである。

ところで当代の国公立中等学校の教育は、おうむねフランスの社会界から高い評価を受けていた。それでも新興の教育学を教育実践に活用したならば、もっと教育効果をあげることができると考えられたのである。

しかし当代の一流の学者といわれるような人は、まだ教育学の価値

をそれほど認めていなかった。その理由は、一流の学者になることができたほどの人は、教育学の助けを借りなくとも、一流の学者になることができたからであるということができるのである。

クルノ (Cornot) は、「小学校教師には教育学が必要であるが、中等^セ学校教師には教育学は無用である」(3, 192) と述べている。著名な歴史学者であり、パリ大学教授、パリ高等師範学校長 (在任一八八〇年から一八八三年まで) のフュステル・ド・クーランジュ (Fustel de Coulanges, 1830—1889) も、「教育は消化である。わたくしの医師は、わたくしが消化していることを十分に認識している。わたくしは消化することで満足している。」(3, 193) と述べている。

このような教育学無用論に対して、教育学者マリオンは、学校教師にとって教育学教養の習得が必要であることを力説した。かれによれば、教育の仕事は、他のすべての職業と同じく専門的修業を必要とする。それなのに初任者の教師は、効果的な教授法を避けようとしたり、教育の天才が試みて成果をあげた実験授業研究の参考書を見ようともしないで、慢然と授業を行っているというのである。

マリオン教授とともに、パリ高等師範学校校長 (在任一九〇四年から一九二二年まで) のラヴィス (Lavisse, E., 1842—1922) も教育学の価値を認めていた。

かれによれば、(一)学校教師の専門的力量を信頼し、職務上の自律性を高めるために、教育行政当局は授業時間割表や学習指導要領 (教授要目) などの作成や変更などの職務命令を出すことをできるだけ控えることが必要であること、(二)将来の学校教師は児童心理学、教育史、

教育学史、偉大な教育家の教育思想や教育学説などを履修することが必要であること、(三)教師志望者は青少年に対して道徳を直接に指導し、青少年の魂の深層にまで透徹する言葉を述べるのを妨げる気おくれを克服することが必要であるというのである。

グルノーブル大学教授デュムニユ (Dumesnil) も、国公立中等学校教師が教育学に精通していないために、粗雑な授業をしていると指摘している。

しかし学校現場での大多数の教師は、おうむね良心的な授業を行っていたのである。学校管理職者もその仕事が目まじに煩雑になっていったにもかかわらず、できるだけ情性に流されないように配慮していた。オンフルール公立中等学校教師ソレル (Sorel, A.) は、一八七三年から一九七二年までの三〇年間にわたって、つねに生徒の実態に即した、きめの細かい授業を行い、好評を得たのである。

国立中等学校^セ頭^{サント}アダム (Adam) は、自分自身の復習教師、教授、管理職者としての経験を生かして、一八八一年度以降の生徒訓育指導計画表を作成した。かれは、生徒に細かな校則を強制するようなことは、できるだけ避けて、生徒の自律的な道德性の育成を図った。

かくして当代のフランスの国公立中等学校教育の目的は、自由に世俗的な民主主義国家に必要な^{シヴィライズ}公民の形成、つまり「同情に満ちた温顔、健康にして活気に満ちた、機敏にして持久力に富む身体と、精神的にして真摯な、他者に支配されない自治にふさわしい性格をもった人間を陶冶する」(3, 193) ことにあったといえるのである。

三 国公立中等学校専科課程の成立と発展

(一) デュルユイ文相による専科中等教育の創設

デュルユイ文相 (Dury, V. 1811—1894) (文相在任一八六三年六月二三日から一八六九年七月一六日まで) は、一八六五年六月二日の法律によって専科中等教育を創設した。

専科中等教育の教育課程は、「第4表」に示す通りである。

一八六六年の専科中等教育の教育課程は、国語、現代外国語、科学、歴史、地理、簿記、製図、測量を含んでいたが不完全なものであった。それはまだ模索的な教育課程であり、一部分的には見当外れの所もあった。しかし一八六六年から一八七五年までの一〇年間に、零人から二二、七〇八人にまで増加したのである。

専科中等教育の実情はきわめて悲観的であり、教育方法も混乱したままであった。教職員も不足しており、教育行政当局の予算配分もあり好意的ではなかった。中流階層の家庭はギリシャ語、ラテン語古

〔第4表〕 専科中等教育の教科課程 (1865年6月21日法律)

必須教科	道 国 歴	宗・文 語・国 史・地	教 学 理
	科学	応 物 力 博 と	学 学 学 業 農 業 用 の 他 の 応 用
	製 簿	図 記	
選択教科	現代外国語	ドイツ語 英語 その他	
	法 工 衛 生 意 唱 体	制 業 ・ 農 業 ・ 模 倣 図 案 学 生 歌 操	

フランス第三共和国初期における中等教育制度の近代化過程についての一考察

典教育を非難していたが、隣人の子弟がそれを履修しているために、親の虚栄心から自分の子弟にも古典語を履修させていたのである。

当代のフランスでは「高等」と呼ばれているが、まだ初等教育段階にあった高等小学校教育よりは上級程度の中等教育を要望している多数の家庭が存在していた。しかしこれらの貿易商、農業、工業、下級官公吏などの家庭は、伝統的な古典課程中等教育の修学期間や知識の詰め込みだけの教育方針を、自己の子弟にはふさわしくないと痛感していた。

これらの家庭は、その子弟を弁護士、医師、文学者、官公吏へ養成してもらおうとはまったく考えていなかった。しかし、かれらは子弟が将来進んで行く職業の要請に十分に対応することができると知的教養を、子弟に与えたいと考えていた。ところで初等教育はこのような要望に十分に応ずることはできなかった。かれらは古典課程中等教育のように、ぜいたくな実務軽視のおそれのある教養ではなくて、初等教育よりは高度の一般教育であり、また古典課程中等教育よりは短期の理論中心でもなく実務も重視する、また文学中心でもなく科学(数学・理科)も重視するような中等教育を要望していたのである。

かくして一八八〇年には公立中学校(コレージュ)の全生徒数の五〇パーセント、すなわち古典課程一四、九九二人に対して専科課程一四、〇一二人となり、また国立中等学校(リセ)では、全生徒数の二五パーセント、すなわち古典課程三二、〇〇〇人に対して専科課程八、九六六人にまで躍進したのである。

しかし公立中等学校の全生徒数の五〇パーセント、また国立中等学

校の全生徒数の二五パーセントを、専科課程履修生徒が占めるようになったとしても、ギリシャ語・ラテン語古典教育の振興を考えている一部の保守派の教師にとっては、専科課程履修生徒の比率をさらにもっと高める必要があると主張していたのである。

なぜならギリシャ語・ラテン語古典教育のように、生徒が学習に多大の困難を感じている教育の場合には、もっと生徒の質を厳選して、もっとも優秀な少数の生徒のみを対象として授業を行った方が、古典課程教育の充実を図っていくことができるのではないかと考えられたからである。

ボワシエ (Boissier) は、古典課程中等教育によって将来の自由職業者に養成するのは、せいぜい一万人程度でよいと考えている。他方では商工業の従事者に養成するのは三万人になっても多過ぎることはないというのである。ゼボル (Zevort) は、将来では、専科中等教育が一般教育になり、古典中等教育は専科教育になることが、国家社会の人材の計画的養成という見地からみれば、必要になってくると主張している。

なぜなら「専科」(Special) ということばの意味は、文学専修とか科学(数学・理科)専修というような専科的色彩を濃厚にして、実務にも理論にも強い生徒を養成していくことにあったからである。

専科中等教育の修学期間は、基礎科二年、中等科三年、高等科二年の七年間であった。多くの家庭は中等科第一学年か第二学年の修了時に子弟を中途退学させた。それゆえかれらの学力は小学校卒業の優等生の学力に相等したにすぎない。専科中等教育の専任教員の不足のた

め、古典課程専任教師が、専科課程の授業の一部を兼任した。しかし多くの教師は、「馬の耳に念仏」のような雑談調の授業にあまり熱意を持たなかった。専科中等教育の中等科の授業の実態は、高等小学校の教育とほとんど大差がなかった。専科課程の専任教師の供給源は各県師範学校とクリュニ (Cluny) 高等師範学校であった。しかし各県師範学校はもともと小学校と高等小学校の教員養成を使命とする学校であり、専科中等教育の中等科と高等科を担当する教員の養成を使命とするクリュニ高等師範学校は、その入学試験が比較的容易であったがために、生徒の質的水準の格差が著しく大きかったのである。したがって世人の信頼を得るに足るほどの優秀な教員を養成することもあまり十分ではなかった。

専科課程履修の生徒の質も古典課程履修の生徒と比べて遜色があり、そのため世間の人びとの専科課程中等教育に対する差別の偏見を是正することはきわめてむづかしかったのである。

一八七〇年から一八八〇年までの専科課程の修了・卒業者は、「国語野郎」とか「豚児」と軽蔑された。国公立中等学校の教師の側からそのような差別と偏見を打破しようとする運動もほとんど起らなかったのである。

一八八〇年までは古典課程だけが大学に直結する大学入学資格試験への道を開いていたのである。シモン文相は、専科課程での厳格な進級試験の実施だけが専科課程の社会的威信を高める方法であり、生徒を専科課程に引き寄せることになると考えていた。しかし実際には専科課程の進級試験はおうむね容易であった。そのために「専科」(Spécial) (3)

182—183) という名称は、「怠け者」とか「鈍才」を連想させる「落ちこぼれ」とか「くず」の教育というように世人から不信任を持たれたのである。

(二) フェリ文相の改革

フェリ文相は、そのような専科中等教育の状況を、専科中等教育大学入学資格試験制度の設置によって、改善しようとした。

かれは、一八八一年五月二日に文部省内にデュルユイを委員長とする専科中等教育課程および専科中等教育修了認定試験の刷新委員会を設置した。専科中等教育刷新委員会は、専科中等教育の教育内容と現実社会とのかわりについて慎重に審議した。

専科中等教育の教育内容は、古典課程のように七カ年をかけてギリシャ語やラテン語を中心として百科辞典風の基礎知識を系統的に習得して卒業していくという同心円的な教育体系ではなかったたのである。

専科中等教育の教育課程の特色は、ギリシャ語・ラテン語古典に匹敵するような国語古典の系統的な配列にあった。

専科中等教育には、古典課程の初等教育段階である第九、第八、第七学級に類似した基礎科二カ年と中等科三年と高等科二カ年が設けられていた。所定課程修了者には履修期間に応じて、中等科第一学年修了者には中等科第一学年修了証書、また中等科三年修了者には中等科修了免状、高等科修了者には専科修了免状が交付されていた。

専科中等教育刷新委員会では、優秀な成績をあげた専科修了免状取得者がかねてから要望していた「専科修了免状」の名称を「専科中等教育大学入学資格学位免状」に変更する案が審議された。

「専科中等教育大学入学資格学位免状」設置に対する反対論者の要旨は、次に示す通りである。

大学入学資格学位免状は少なくともラテン語古典文化の学識を証明する免状である。フランス人はラテン語古典文化直系の継承者である。ラテン語古典文化はフランスの国語と文明に著しい影響を及ぼしている。またラテン語古典文化はフランスの知的優秀性の要素である。ラテン語古典文化ほどフランスの知的優秀性を示す指標は他にないというのである。

つぎに「専科中等教育大学入試資格学位免状」設置に対する賛成論者モレル (Morel, G.) の意見の要旨は、次に示す通りである。

まじめな学業修了者に対しては、だれであっても、またその学習内容が何であっても、大学入学資格学位取得者の称号を与えるのは当然である。ギリシャ語やラテン語を履修していなくても、専科課程の第四学年と第五学年の文学と科学を専修する教育課程は複雑かつ豊富であるから、教養のある意志強固な人物を陶冶することができるのである。専科修了免状は古典課程を皮相的に生かじりただけの、ラテン語の成績の良くない科学大学入学資格学位免状よりは価値がある。

現実の社会から多大の関心を寄せられている専科中等教育の社会的地位を向上させる唯一つの道は、専科中等教育の頂点に思いやりのある称号を設けることである。大学入学資格学位免状という名称が、古典課程中等教育履修者の相等に多数の部分を惹きつけているとすれば、専科中等教育大学入学資格学位免状の設置は、ギリシャ語・ラテン語古典人文科の学習に手こずっている人、また能力もなく成績も良くな

いのに、ただらだと情性だけで古典課程を履修している人の学習負担を軽減することができるというのである。

これまでのフランス中等教育の栄光と連帯性を形成してきたギリシャ語・ラテン語古典人文科教育を拡充・刷新すること、また新興の近代科学中心の実務教育を發展させていくことが当代の重要な課題であった。

そのためには、どちらの教育も「並行した形態で強化する」(6.608)ことが最善の解決策であると考えられたのである。

かくして専科中等教育刷新委員会は、「専科修了免状」に「専科中等教育大学入学資格学位免状」の名称を与える提案を、賛成一一票に對して反対四票で可決した。

公教育高等評議會は、一八八一年七月三〇日の會議において、専科中等教育刷新委員會の決議を尊重して承認した。フェリ文相は、一八八一年八月四日に専科中等教育大学入学資格学位免状設置法令にグレビ大統領の署名を得た。

かくして当代の国公立中等学校では、「第2図」に示すように、古典課程と専科課程という二つの課程がいずれも大学へ直結する教育系統として設けられたのである。

改革後の専科中等教育の目的は、実務についての觀念とならんで、中等教育に固有な没利害的な高度の一般教養を施すことになった。専科中等教育の修業年限は五カ年である。

専科中等教育の教育課程は、国語、文学、道德、歴史、地理、現代外国語(ドイツ語または英語、そのほかイタリア語、スペイン語、ア

ラビア語も選択可)、数学、物理学、化学、博物学、簿記、法制・經濟であった。

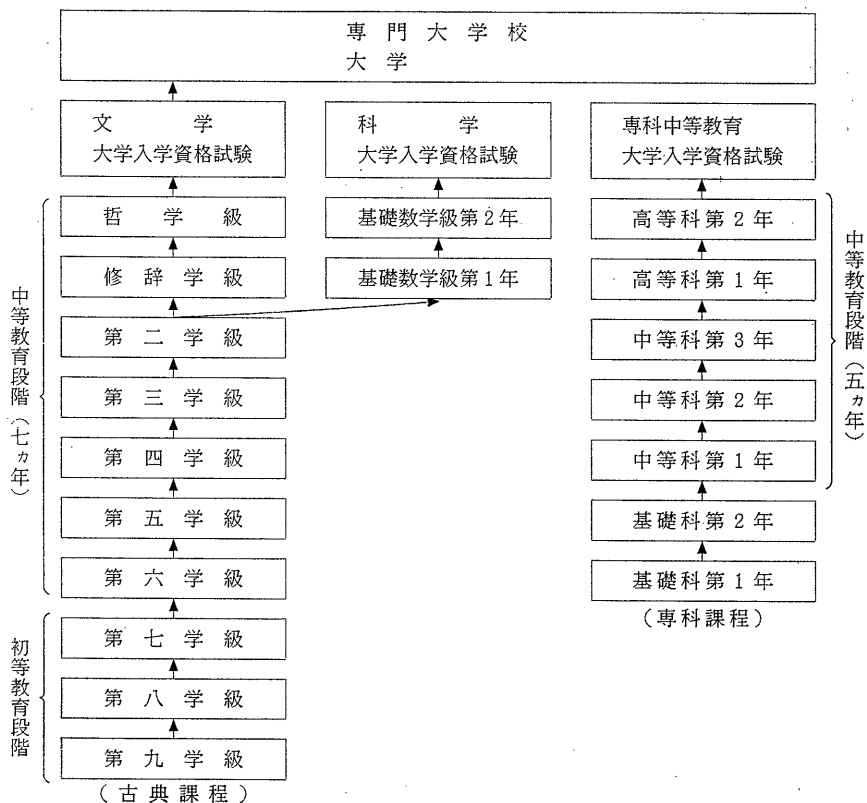
フェリ文相による古典課程中等教育と専科課程中等教育の並行措置は、中等教育界に中等教育のあり方をめぐって、広汎な議論の渦を巻き起した。ヨリ(Bigot, C.)とマニエブリエ(Maneuvrier, E.)は改革派の理論、またはフラリ(Frery, R.)は革命派の理論、さらにフィ(Fouillée, A.)は保守派の理論の代表者であった。

ビゴはかれの友人モレルとともに、一八八〇年の改革を支持している。ベイス(Vaines)は中等教育の教育課程が専科課程において無限に拡充していくことには慎重な態度を取っている。ベイスの意見の要旨は、次に示す通りである。

新教科がだれの眼にも重要な教科に見えるようになるたびに、また人間の精神になんらかの功効ができることが明らかになるたびに、中等学校のエ育課程の中の地位を与えなければならないということになるだろうか。教育では質とともに量も重要である。中等教育は科学と同じくらい文学も認識させることが必要である。

そこで各大学区ごとに一校または二校程度の国立中等学校だけが、伝統的なギリシャ語・ラテン語古典教育を維持するのである。そのほかの中等学校は国語古典教育を行うこととする。ギリシャ語古典科とラテン語古典科と国語古典科は、それぞれ優秀な専門教師が担当する。そのために学級担任教師制度は廃止する。ギリシャ語、ラテン語、国語の各教科別の中等学校教授資格試験を設置するというのである。

パリ高等師範学校哲学専攻学生マニエブリエは改革派の立場から意



〔第2図〕 1880年代のフランス中等教育制度

論理学や道徳学、(二)物質の実証科学である物理学または生物学と、精神の実証科学である文学と歴史学という学問の分類法によるのである。

当代の中等学校では、工業の発展にともない、実証科学としての物理学や化学の充実が叫ばれている。しかし工業の発展がどれほど大きなものであったとしても、人間のあり方や社会のあり方を根本的に変化させてしまうほど革命的であるというわけではない。

それゆえ教育のあり方としては、児童が二三歳になるまでは小学校の教育を受ける。中等教育の前期課程四カ年(一三歳から一七歳まで)の教育では、ギリシャ語・ラテン語古典と現代外国語をみっちり履修する。同後期課程二カ年(一八歳から二〇歳まで)の教育では、国文学と哲学を履修する。かくして中等学校生徒は、閑暇をたっぷり持ち、休暇を少なくすることによって、身体の過労も避けることができるようになるというのである。

見を述べている。これによれば、教育課程には形式科学と実証科学という二種類がある。それは、(一)物質の形式科学である数学と、精神の形式科学である。フランス第三共和国初期における中等教育制度の近代化過程についての一考察

育尊重派に対して痛烈な批判をしている。かれの意見の要旨は、次に示す通りである。

伝統的なラテン語古典教育支持者は、ラテン語古典教育が無用であ

るがゆえに高尚であり、またそれは高尚であるがゆえに無用なのであると言う。しかしラテン語が国語を理解するために有用であるということとは、どうして証明されるのか。

ラテン語と国語の教育では、相互に翻訳する作業や、両者に共通した類似のことから解釈する作業が行われている。なるほどフランスの偉大な著作家は、過去の著作家の影響を受けて大家になったのである。しかし、そのことによって、われわれはフランスの偉大な著作家の思想を、その師匠の著書を直接に読むのでなければ理解できないということになるだろうか。モンテーニュ (Montaigne, 1533—1592) の思想を理解するために、古代のセネカやプルタルコス of 著書をどうしても読まなければならないということはないはずである。「テレマコス」(オデュッセウスとペネロペの子) のような読み物は、古代ギリシャのホメロスやソフォクレスを不幸にしてまだ知っていない人びとを対象にして書かれた作品ではないのか。

ラテン語授業ほど生徒をうんざりさせているものはない。それにもかかわらずラテン語の学習は有用であるといわれている。それは、あたかも二カ年にわたる音階 (楽典) についての学習が、音楽を別として、なんらかの価値をもっているのと同じである。

その程度の価値だけで、ラテン語授業の退屈さは償われるのか。本当はもっと良い知育によって埋め合わせることができるのではないか。近代文学は良い知育を与えることができるのではないか。

もともと古代文学は一般文学の一部分でしかないし、一般文学という分母はたえず無限に拡大して行っているのであるから、古代文学と

いう分子はたえず減価して行っているといつてよいのである。

それではラテン語古典による立派な政治教育がラテン語授業の退屈さを償うことができるだろうか。いかにも古代ローマ人は、ぜいたくな生活における節度の大切なこと、機械的で画一的な教育、徳の強制、見事な平等、劇的な同胞愛などを述べている。けれども、われわれはそのような例をどうしても見なければならぬということもない。なぜなら、われわれは古代のローマ人ではなく、フランス人であり、今日のフランス人以外の何物でもないからである。

それゆえ、青少年の精神を完全に陶冶することによって、有用な職業に従事できるようにするための教育が必要である。職業準備教育では科学 (数学・理科) が重要な地位を占めることになる。もっとも科学教育をあまりにも早期から始めることは得策でもないし、濫用することも控えなければならない。

外国語、とくに英語の教育は教育的価値が大きく有益である。そのほかには哲学と国文学と文明史と地理も含めておくとういというのである。

このフリリの意見に対して、多くの反対論が主張されたが、その代表は哲学者フィエであった。

フィエの意見の要旨は、次に示す通りである。

自由人養成の一般教育の内容は、ギリシャ語・ラテン語古典の系統的な教育とそのしめくくりとなる哲学の教育によって構成されるのである。

教育は功利主義に墮落してはならず、真、善、美に対する愛着を發

達させることが必要である。理科は独断論的な講義になりやすく、生徒の精神を受動的にしてしまいがちである。国文学は生徒の精神を覚醒させるためには、ラテン語ほどの教育力を持っていない。生徒の精神を活発に働かせるようにするためには、ラテン語仏訳や仏文ラテン語訳が必要である。

フランス国家の指導者階層が何代にもわたって身につけてきたラテン語教養は、国民の道徳的連帯を維持するためにも必要である。

フランス語の人間味豊かな芸術的な意味を維持するためには、ラテン語教育の維持はどうしても必要である。

古代ローマ人は軍人としての徳性や、政治への参加権をもった市民としてのあり方の模範を示している。かれらの市民道徳はフランス国家社会の公民道徳にふさわしいものである。かれらの教会用語は、フランス国民の九〇パーセントが旧教徒であることからみても、当然に学習することが必要なのである。

ラテン語古典教育のみが民主主義社会における指導者養成教育を行うことができるのである。五〇人規模の学級の中に中級以上の学力に到達した優等生が五または六人居るとすれば、かれらこそは、文学、芸術、哲学、科学（数学・理科）と、一般的な見地からみた政治の伝統と、知的、道徳的、市民的な見地からみた生活様式の伝統を継承していくことになるのである。

ラテン語古典教育は天才的な優秀な生徒だけを対象とするのでは十分なものになりえない。少数の優等生（エリート）を産み出すためには多数の予備軍が必要である。ラテン語古典教育が多数の並み才の生

徒にとってうんざりするものであったとしても、そのことを口実として、ラテン語古典教育の生産的な効果を台無しにしてしまうことは避けなければならないのである。それだけでなくラテン語古典教育に倦まず撓まず喰いついていくという辛棒強い練習からは、多大の教育的効果が得られるというのである。

(三) ゴブレ文相の改革

ゴブレ文相 (Goblet, R. 文相在任一八八五年四月六日から一八八六年二月一日まで) は、専科中等教育大学入学資格学位免状の効力を強化して、もっと広汎な大学入学と公職への就職の門戸を解放させることを、専科中等教育大学入学資格学位免状認定審査委員会に対して諮問した。

ゴブレ文相の提案の要旨は、次に示す通りである。

最近の中等教育の改革は、期待されたほどの上首尾の成果をもたらしてはいない。古典課程中等教育の水準は、数年来、一貫して低下してきている。公教育行政当局は古典課程中等教育の水準の向上を図るため努力しなければならない。とりわけ古典教育を必要としており、また高度な教養を身につけたいと望んでいる青年に対して、古代語教育とならんで、いわゆる古典教育を与えることが必要である。

その他の大多数の生徒に対しては、現代社会の要請に応ずる教育、すなわち専科教育と呼ばれている中等教育、工業や商業の職場で有利な地位につくのに必要な一般教養の恩恵を保障することが必要である。

専科中等教育は高等小学校教育または限定された目的をもった職業

教育と混同されてはならない。専科中等教育はギリシャ語とラテン語を教育しないけれども、真の意味での古典教育でなければならぬ。

中等学校生徒が専科中等教育に魅力を感じるようにするためには、

専科中等教育大学入学資格学位免状取得者に対してもっと効果的な認定を与えることが必要であるというのである。

文部省専科中等教育大学入学資格学位免状認定審査委員会は、文部省ならびに他の諸省庁の了解を得て、ゴブレ文相案を可決した。

さらにゴブレ文相案は、一八八六年九月一日の覚書によって、全行政官庁によって承認された。

文部省中等教育局長ゼボル (Zévor) は、一八八六年三月一日に専科中等教育大学入学資格学位免状取得者に公職への就職にあたつての特典を与える法案に関する報告書を、ゴブレ文相に送付した。

「閣下の提案の目的は、いまやたえず増大の一途をたどつて改善されてきた、またわが国の将来の繁栄に影響する教育に、旧来の教育に比してなんらの遜色もないことを証明し、また正当な地位を与えることにある。

世論が要望し、公権力が奨励し、またわが国の民主主義の切実な要請に完全に即応するばかりでなく、国運の発展にも重大な影響を及ぼす、この改革を閣下が推進されたことは、閣下の行政の輝かしい栄誉となるでしょう。」(4, 184—185)

ところで、このような専科中等教育の地位の向上は、ギリシャ語・ラテン語古典担当教師の反発を招くことになったのである。ギリシャ語・ラテン語古典担当教授資格教師 (アグレジェ) は、専科課程担

当教授資格教師が自分たちよりも比較的に容易に教授資格を取得していることを理由として、かれらと同格の処遇を受けるのは不当であると主張した。

その結果、一八八七年に公教育高等評議会の委員として有名なギリシャ語・ラテン語古典文学者メルン (Merlet, G.) が選出されたことは、かれらの不満の意思の表明であつたとみることができるのである。同時に、公教育高等評議会が、ゴブレ文相による専科中等教育大学入学資格学位免状の効力の昇格措置は文相の職権の重大な越権行為であり、まったく向う見ずな改革であるとみなしたということができるのである。

ギリシャ語・ラテン語古典による一般教養教育の擁護を旗印とする中等教育問題研究会事務局長ピジエノ (Pigeonneau) は、専科中等教育の昇格は、専科中等教育の創設者であるデュルユイ文相の教育理念をまったく曲解したものであると抗議した。

かれによれば、ゴブレ文相の措置は、専科中等教育が商業界へ幹部店員、工業界へ職工長を送り出す代りに、財政予算を喰いつぶす新規の俸給生活者を大量に送り出すことになるというのである。

一八八六年に専科中等教育が創設された当初の段階では、それは家庭と地域社会の要請に対応できるだけの弾力性を持っていた。それは職業教育とまではいかなかったとしても、少なくともなんらかの職業に就職できる程度の教育を施したのである。さらに専科中等教育の修学期間も古典課程よりも短期であつたために、家庭と社会の教育要求に対応することができていたのである。

しかるに一八八二年のフェリ文相の措置と、一八八六年のゴブレ文相の措置は、国公立中等学校の教育を大きく実学主義の方向へ発展させて行なったけれども、相対的に古典課程中等教育の水準を質的に低下させるように機能したのである。したがって一八八二年と一八八六年の改革は、専科中等教育を中途半端な古典課程中等教育に変質させてしまったのである。とりわけ一八八六年の改革は、専科中等教育大学入学資格学位免状に公職への就職の特典を与えたことによって、官僚社会への門戸を開放し、家庭の虚栄心に好餌を投げたというのである。

かくしてゴブレ文相の措置は、国語古典課程大学入学資格学位免状をギリシャ語・ラテン語古典課程大学入学資格学位免状と同格の権威を持つものにしたと考えている人びとと、ギリシャ語・ラテン語・国語古典課程大学入学資格学位免状の維持と同時に、専科中等教育大学入学資格学位免状に対して、これまで通りのつつまじやかな性格を保持させておきたいと考えている人びととの間に激しい紛争を惹き起してしまったのである。

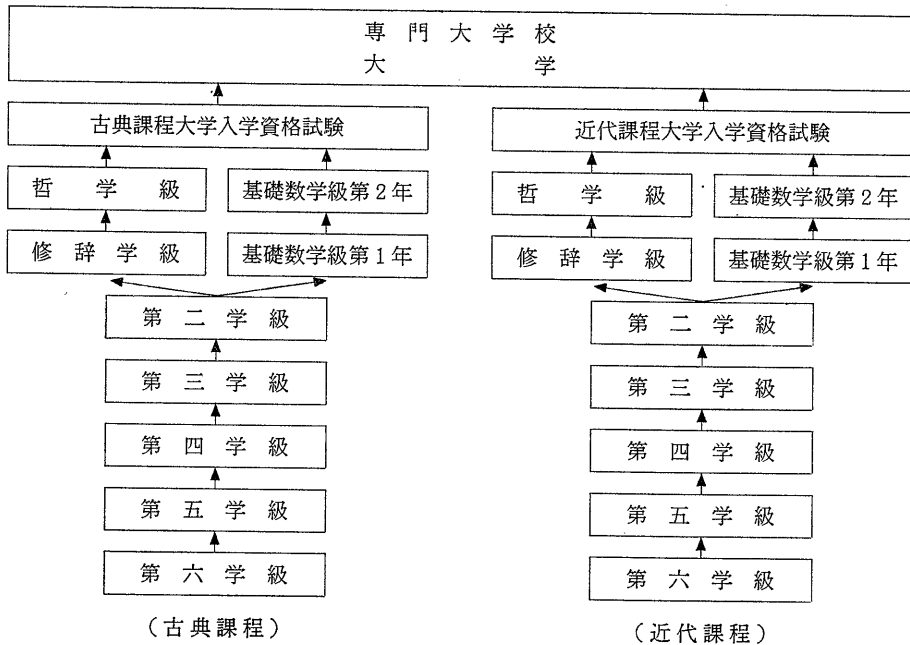
四 ブルジョワ文相の改革

ブルジョワ文相 (Bougeois, L. 1851—1925 文相在任一八九〇年三月一七日から一八九二年二月五日まで) は、古典課程中等教育支持者と専科課程中等教育支持者の紛争を仲裁しようとした。

ブルジョワ文相による一八九〇年の改革は、(一)古典課程中等教育の全生徒は、修辞学級修了時まではギリシャ語・ラテン語を全学年にわたって系統的に継続して学習すること、(二)これまでの文学大学入学資格

試験と科学大学入学資格試験と文理科履修分離制にともなう各種大学入学資格試験を廃止して、それらを一本化した古典課程中等教育大学

〔第5表〕 1890年代のフランス中学校の学級系統



入学資格試験を新設することになった。

ブルジョワ文相の、この措置は、ギリシャ語・ラテン語古典教育擁護運動を展開してきた、伝統保守派の中等教育問題研究会にとっては、いちおうの勝利と目されたのであるが、保守派に対立する人びとは、翌年再び巻返しに出たのである。

ブルジョワ文相は、一八九一年六月四日の法令によって、専科中等教育を近代課程中等教育と改称する措置を取った。かれは、ギリシャ語・ラテン語古典と実質的に同格になった国語古典に「近代」^{ネデル}という名称をつけることによって、公教育高等評議会内部の意見の対立を調整した。

この措置によって、デュルユイ文相が一八六五年六月二日の法律によって専科中等教育を創設して以来、一八九一年までの二五カ年にわたって、たえず不信と輕蔑的になってきた「専科」^{スペシヤル}という名称は、完全に廃止されたのである。

近代課程中等教育は古典課程中等教育と「同じ修学期間」(1, 320)となり、近代課程中等教育の各学級の名称も古典課程の各学級の名称と同じになった。専科中等教育教授資格試験も廃止された。したがって一八九一年六月以後では、中等学校の学級系統は、「第5表」に示す通りになった。

近代課程中等教育の教育課程の特色は、(一)ギリシャ語・ラテン語に代って、現代外国語を履修するようになったこと、(二)国語古典の地位が向上し、国語古典はギリシャ語・ラテン語古典と同格になったこと、(三)科学(数学・理科)が重視され、科学は文学と同格になったことで

ある。

かくしてドイツの実科学校(Realschulen)に類似した教育をフランスの教育風土に順応させようとした長期にわたる試みは、遂に消滅した。古典課程中等学校教育とは別個の中等教育は、「中等」^{ミッセル}という指導者階層の教育と共通の名称をもっていたがために、進級試験やその頂点の大学入学資格試験もかなりに厳しいものであり、またかなりに理論的であり、教育的であるという条件でしか存続しえなかったのである。それにもかかわらず国際貿易時代を迎えて、現代外国語教育という実科教育は一貫して重視されたのである。

ブルジョワ文相による近代課程中等教育は、近代課程中等教育の支持者からは、近代課程の近代化が不十分であるとして歓迎されなかった。文学者ミッシェル(Michel, H.)のような人も、「近代課程中等教育の修学期間が競争相手の古典課程中等教育のように七カ年を与えられていない」(3, 186)と抗議した。これは旧専科課程の基礎科の二カ年は実質的には古典課程の初等教育段階に類似した学年であり、そうなると近代課程中等教育は、実質的には旧専科課程の中等科三年と高等科二年を合わせた五年間が修学期間とみなされるからである。

当代の有機化学の創始者であり、コレージュ・ド・フランス教授ベルトロ(Berthelot, M., 1827—1907)は、ギリシャ語・ラテン語古典文学と国語古典文学を全部履修する教育は、生徒の学習負担を過重にさせるだけで無益であると主張した。かれは、文学教育をギリシャ語・ラテン語古典に一任し、国語古典の近代文学をあまり信用していない傾向があった。かれによれば、フランスの中等教育はあまり文学

を偏重し過ぎており、科学（数学と理科）が軽視されているというのである。今後の新中等教育では、数学と物理学と博物学が本質的要素になるべきである。そのためには、(一)古代文学を基礎とした、ある程度の科学的教育を兼ね備えた中等教育と、(二)科学（数学・理科）を基礎とした、ある程度の近代文学的教養を兼ね備えた中等教育の並行的な運営が、当代のフランス社会の実情にふさわしい中等教育のあり方であるというのである。

それは当代のフランス社会階層の全体の勢力関係からみても、必然的に方向づけられる教育のあり方であった。科学（数学と理科）は文学と同格の教育力をもっているのであるから、当然に中等教育の有力な一翼を担わなければならないようになっていたのである。

当代のフランスでは、たんに古典課程中等教育と近代課程中等教育の対立の問題だけでなく、中等教育のその他の諸問題も、多くの人びとの議論の対象になった。新聞記者や評論家のような人びとも、たいていは国公立中等学校の卒業生であったし、また現実に中等学校へその子弟を送っている親でもあったから、本職の中等教育関係者でないとしても、フランスの国民生活に重大なかかわりをもっている中等教育問題に対して国民の立場から積極的に発言したのである。

しかし中等教育問題を批判することは、だれにでも比較的容易であるが、実際にある問題を解決し処理することは困難である。したがって中等教育問題をめぐる世論の動向としては非観論の方が多かったのである。

テーヌ (Taine) は、フランス中等教育、とくに国立中等学校と教

会立中等学校が青少年の生活と活動を抑圧していると警告している。かれは、中等教育の改善を要する点として、(一)体育の導入、(二)ギリシヤ語・ラテン語古典教育偏重の緩和と有用な職業教育の実施、(三)寄宿舎生活の改善をあげている。

かれは、中等教育が全体としては青少年のためというよりは、前途有為な青少年の精神を痛めつけており、百害あって一利なしときめつけている。その結果、中等教育では、学校の教育と社会生活との調和がまったく失われているというのである。

デュピュイ文相 (Dupuy, C.) (文相在任一八九二年二月六日から一八九三年四月三日まで) は、一八九二年に競争相手の教会立中等学校の躍進にかんがみて、国公立中等学校教育の充実を要請している。

ブージュ (Bouge) は、一八九六年に国公立中等学校の管理職者、教授、復習教師に対して、教育の実情について厳しい批判を述べている。

一九世紀末頃には大学入学資格学位免状取得者の就職浪人が、大挙して自由職業へ殺到するようになった。このような社会現象は、一八八九年の兵役法の施行以来とくに加速化された。多数の青年が二カ年の兵役を免除してもらうために、その修学期間の延長を希望するようになっていた。その結果、本気で学問をやるつもりもないのに、兵役を免除してもらおうという理由だけで、修学期間の延長を望む者が激増し、大量の無産者知識人を発生させた。そのような社会の混乱の原因は、国公立中等学校と大学入学資格試験にあるといわれたのである。

ブルジョワ文相による一八九一年の近代課程中等教育大学入学資格

学位免状の新設は、中等教育界でのかつての古典派と近代派の論争を再び再燃させることになった。近代派は、近代課程大学入学資格学位免状は古典課程のそれと同等の効力を持つべきであると主張した。とりわけすべての自由職業と公職への就職の門戸を開放すべきであると要望した。

官公庁は、伝統的に古典課程大学入学資格学位免状取得者だけに認められていた特典を近代課程のそれにも認めた場合には、官公吏に対する一般世人の威信を低下させることになりはしないかと危惧した。税務署と登記所は、最初は頑として門前払いしたが、大蔵大臣と文部大臣が合同して説得した結果、しぶしぶ近代課程出身有資格者の応募を認めた。文部省（公教育・芸術・宗教省）関係では、大学の法学部と医学部は近代課程出身有資格者に対しては、門戸を閉ざしたままであった。法学部と医学部は、近代課程出身有資格者に限って、学部独自の履修登録条件との照合審査後にしか、学部での履修登録を認めなかったのである。

近代課程中等教育支持者のルメートル (Lemaître, J) は、一八九八年にフランス民主主義社会における古典課程中等教育の時代錯誤を非難した。かれの主張の要旨 (3, 196) は、次に示す通りである。

わが国の小市民階級と多数の庶民大衆の子弟は、かつてイエス教団所属聖職者が、絶対王政時代の社会において、きわめて巧妙な方法で貴族、官吏、特権階級の子弟を教育した事柄と、まったく同じような事柄を学習するのに八年ないし一〇年もかけているのは、無謀ともいえる時代錯誤である。パリの二または三校の国立中等学校と、大学所

在都市の国立中等学校だけが古典教育課程を維持するだけで十分である。

その他の近代課程中等学校の教育課程は、国語・国文学、ドイツ語・ドイツ文学、英語・英文学、国史、科学（理科）、数学、地理学の各教科を中心とした実用主義的観点から再編成することが必要であるというのである。

近代課程中等教育は近代課程大学入学資格試験に至る道を用意した。ところがそれは古典課程のそれと比べると修学期間が実質的には一年短かったために、経済的に有利であった。そのために、かえって近代課程大学入学資格学位免状の価値について異議が起ってきたのである。そこでルメートルは近代課程の中等教育も七年にすることを提案した。増えた一年分の教育課程には科学（数学と理科）と現代外国語を配当すべきだというのである。なぜなら科学（数学と理科）は文学に匹敵する教育力をもっているし、現代外国語は国際交流や経済活動に必要な技能であったからである。現代外国語授業は実際には適当な教師の不足ということもあって、なかなか実用語学の授業は行われていなかったのである。

近代課程中等教育の本来の目的は、商工業界に人材を送りこむことにあったのであるが、結果的には古典課程大学入学資格学位免状よりは価値の低下した近代課程大学入学資格学位免状の取得者を大量に産み出し、公職へ殺到させることになってしまったのである。

古典課程支持者は、かつての専科中等教育を軽視してきたことを悔んだ。古典派の牙城である中等教育研究会は、旧専科中等教育を「実

科教育」(3, 197) という名称のもとに復活させることさえ画策したのである。

かくして当代の国公立中等学校教育は、(一)私立中等学校との競争、(二)新聞雑誌からの批判、(三)教育界内部での古典派と近代派の対立の激化によって、ますます混乱と苦悩を深めていったのである。

四 国会リボ委員会による中等学校教育調査

国公立中等学校教育界の混乱した事態をみた国会は、一八九八年にリボ (Ribot, A., 1843—1923) を委員長とする中等教育調査委員会を発足させることになった。リボ委員会は、一八九九年一月一七日から同年三月二七日までの国会において、あらゆる中等教育問題を審議した。この時期は世界大博覧会がパリで開催されており、あらゆる方面において国際競争の気運がみなぎっていた。

リボ委員会は、一九六人の参考人の意見を聴取し、教育関係者の報告書と、県議会と商業会議所から質問紙調査回答書を受取った。もはや中等教育問題は古典課程と近代課程のいずれが人間の知性の発達に確実に功献することができるといふことではなくなった。つまり、これまでの古典課程中等教育をもっと効果的に改革するには、どうすればよいかが中心問題となった。そのために、近代課程中等教育の精神と方法を古典課程中等教育の中へ取り入れて、古典課程中等教育の性格を改善することになったのである。

中等教育は衰退しているかについて、大学区総長グレアールは、「否」と回答している。ボワシエは、今日の教師は昔日の教師と比べようも

ないほど有能であると述べている。コンブ元文相、パリ大学教授のオラル (Aulard) とセノボス (Seignobos) は中等教育は進歩したと述べている。モノ (Monod, G., 1844—1912) は中等教育の頹廃があると認めている。ベルネ (Bernes, H.) は古典人文科教育の不振が中等教育の取り返しのないほどの衰退を招いたと述べている。

中等学校教師に教育学教養を履修させることが必要かについて、ラビスは必要であると述べ、ペロ (Perrot, G.) とボワシエは必要なしと述べている。

中等学校生徒が過労であるかについては、ブルアデル (Brouardel) のような医師は「ある」と述べている。パリ (Paris, G., 1839—1903) は一人のリセ生徒の学習活動を観察した後で過労があると述べている。大学入学資格試験については、ラビス、コンブ、バルトロ、パシ (Passy, F.) は反対論者であり、グレアールとボワシエは賛成論者である。ジョレス (Jaurès) は、それは正義の保証であると述べ、パリ市のリセの教師は、それは仕事の保証であると述べ、私立中等学校教師は、それは自由の保証であると述べている。

古典派と近代派の論争問題については、法学部での学習にラテン語が必要であるかについて賛否両論があり、教育の実態についての各人が解釈はまちまちである。

参考人の意見が一致しているのは、次のような問題点である。

(一) 校長は上司の教育行政当局者の命令に安易に従順であり、煩雑な法規にしばられているので、もっと優秀な人望のある人物を校長に招くことが必要である。

(二)生徒の学習面では、進級の妨げとなるような過大な学習負担の軽減が必要である。

(三)履修方法としては、全学年を通じての古典課程の一本だけにすることはなくて、近代課程を第三学級以後に設ける場合と、第二学級以後に設ける場合と、合わせて三本立てにすることが必要である。

四大都市の商業会議所は、実用的な会話中心の現代外国語教育が必要であると要望している。

一八九九年の中等学校教育調査の結果、それまでの国公立中等学校のあり方に対する無責任な中傷や非難が雲散霧消してしまい、国公立中等学校の競争相手である教会立中等学校の教育の一時的成功は、政治的、社会的な要因によるものであって、国公立中等学校教育自体の致命的な欠陥によるものでないことが明らかとなったのである。

しかし同時に、この教育調査は、(一)一八八〇年のフェリ文相による改革と、一八九一年のブルジョワ文相による改革がともに大した成果をあげることができなかったことと、(二)どうしても新中等教育制度の組織化が必要であるということを示したのである。

五 私立中等学校

一八五〇年のファル法による教育の自由化以後に発足した私立世俗者系中等学校は、一八七〇年以降ではしだいに衰退の兆しが見えてきたのである。一八五四年から一八七六年までの間に、私立中等学校は八二五校から四九四校に減少した。在俗聖職者が設置した私立中等学校のうち三六校は廃校になった。在俗聖職者が管理した私立中等学校

の教育方針は教会による教会のための教会の教育であった。

当代における屈指の私立名門校であるリセ・シャルルマーニュ校ですら、生徒数一二〇人にすぎず、沈滞した空気に包まれていて、廃校寸前のありさまであった。一八九二年にサント・バルブ校は学校維持のための貸付金を国庫に申請して交破されている。

一八七〇年の独佛戦争後の復興事業として中等教育界での新事業が実施された。その一つは、理工科学校(エコール・ポリテクニク)卒業生団体によるモンジュ校の新設である。

モンジュ校は、(一)学校衛生と体育への配慮、(二)理科教育の重視、(三)寄宿舎での生活指導の刷新などによって、富裕者階層の子弟の募集に成功した。そのため当校の生徒数は、収容定員の四〇〇人を大幅に超過して八〇〇人以上にも達したのである。

その二は、私立アルサス校と呼ばれ、新教徒によって、僅少の財源によって設置された非宗派的教育の学校である。当校はリーダー校長やブラウニングのような教師による立派な道德教育と、家庭的雰囲気の小規模な寄宿舎経営から大規模な寄宿舎経営への転換に成功して、当代の著名な教育家ベール(Berf, P.)やラビスなどからも高く評価された。

これらの二校の教育の成功は輝やかしいものであった。とりわけモンジュ校の寄宿舎費は国立中等学校(リセ)の寄宿舎費の二倍にまで増額されることになった。

しかし立派な施設を完備した、有力な競争校のジャンソン・ド・セイエ校の登場は、これら二校の衰退のきっかけとなった。一八九五年

以後、モンジュ校の資産はリセ・カルノ校へ移管されることになった。アルサス校もモンジュ校と同じ経営不振に見舞われ、破産寸前であった。一八九〇年に国家は、これら二校の経営不振を救済するために、補助金を交付し、翌年の一八九一年にも補助金を増額して交付した。

私立中等学校生徒数の統計 (S. 200) によれば、ファル法施行直後の一八五四年の中等学校の全生徒数一〇七、〇〇〇人のうち、私立世俗系中等学校の生徒数は四二、〇〇〇人であり、三九パーセントであったが、四四年後の一八九八年には一六、二〇〇人のうち、わずかに九、七二五人になり、六パーセントにまで減少したのである。

それでは、それらの生徒は、どこへ行ったのか。ファル法施行後のフランス中等教育界では、生徒は世俗系中等学校から教会系中等学校へ移行して行ったのである。ルイ・フィリップ国王の七月王政政府時代には、国公立中等学校教師の大多数の者は聖職者であったが、一九世紀後半期に入ると、しだいに減少していった。ただし学校管理者の場合には教師ほどには頻繁な人事異動が行われなかったために、長期の留任者が多くなっている。例えば一八七三年まで聖職者身分の在職者は、大学区視学官が四人、リセ校長が一人、師範学校長が二人である。敏腕なリセ校長フォリオレ師は、一八六六年から一八九六年まで三〇年間にわたってリセ校長として在職し、その間にいずれのリセにおいても、生徒の訓育と教育に成功して、生徒数を増加させた。フォリオレ師はリセ校長としてあまりにも名声を得ていたために、ローマ法王庁はフォリオレ師の教育界から聖職界への転勤をなかなか認めなかったくらいである。

そのような事情から、コレージュ・ド・シャルビル校は一八七六年まで、またコレージュ・ド・トゥールコワン校も一八八三年までの長期にわたって、半宗派的、半公立校という性格をもっていたのである。

半宗派的半公立校としては、パリ市のコレージュ・スタニスラ校も長期間にわたって繁昌した。当校は一八四八年の二月革命以後、校長ランズ師とド・ラガルド師によって教育の立て直しが行われた。当校は教育の立て直しにあたって、教師のあっせんを文相に依頼した。文相は、その申請を快諾し、パリ高等師範学校卒業生から最優秀の成績を取得した旧教徒の教師を送りこんだ。かくして当校は宗教教育とあわせて、リセに匹敵する教育を提供したために、生徒の親を満足させた。その結果、一八九〇年には当校の生徒数は一、五〇〇人に達した。その数年後に当校は国立中等学校の有力な競争校に発展し、国家との密月時代は終わったのである。

六 教会立中等学校

当代における教会立中等学校は、その生徒を国立中等学校の教室へ聴講生として派遣していた。このような教育方法は、ボーティン師やラスクルのような人によって支持された。その理由は、国家に対して国立寄宿中等学校の経営を廃止させることにあった。

パリ市でも、一九〇〇年頃にこの方法が採用され、成功している。例えば私立ゼルソン校は、その生徒を国立ジャンソン・ド・セイユ校へ派遣している。私立ボッシュエ校は、その生徒を国立ルイ大王校へ派

遣して、かつて私立サント・バルブ校が同校で占めていたような地位を獲得したのである。

しかし戦闘的な旧教徒は、このような妥協に反対していた。かれらの反対論の要旨(3, 204)は、次に示す通りである。

人間を統治するものは精神である。頭は心情に命令しなければならぬ。真に永遠に堅固な教育とは、原理や教義や信仰を精神の中へ浸透させたり、生命の糧として移植させたりするというよりほかの何ものでもない。

ところが聖俗混成教育は、それとはまったく正反対のことをやっている。それは、見かけだけはキリスト教徒的な司祭の言葉だけのまやかしにすぎない。精神を没頭させたり、身体を保護するということによって、実際には精神と身体を眠らせたり、栄養を与えたり、散歩させたりしているにすぎないというのである。

実際に教会立中等学校は聖俗混成教育のような中途半端な妥協に、いつまでも甘んじているわけにはいかないようになっていた。教会立中等学校は、一八五四年には中等学校の全生徒数一〇七、〇〇〇人のうちの二一、〇〇〇人(一九パーセント)を教育していた。それが、一八九八年には一六二、〇〇〇人のうちの六七、〇〇〇人(四一パーセント)を教育するようになっていたのである。

このような生徒の増加は、とりわけ一八九一年から九八年までの期間において著しかったのであるが、見かけだけのものではあったということが出来る。なぜなら、近代課程中等教育の新設にともなって、多数の小学校(エコール・プリメール)が新設の近代課程中等教育大学

入学資格試験の受験準備教育を行うようになり、それらの小学校は中等学校(エコール・スゴンデール)と改称されたからである。

そのような事情があったとしても、教会立中等学校(コレージュ・ド・コングレガニスト)の教育の成功の原因としては、(一)教育権の拡張への熱情の沈静化、(二)学校の施設設備の充実への期待、(三)国立中等学校(リセ)よりも行き届いた校内生活の監督、(四)富裕な教養のある家庭の子弟を吸収するだけの魅力をもっていたことなどがあげられる。一部の富裕階層の家庭は、教会立中等学校へその子弟を入学させるために、出入りの商人にそのあっせんを依頼することも行われたのである。

それに反して国公立中等学校の方は、たえず公衆の批判の眼に曝されていた。国公立中等学校の教師は、公衆の眼からみてどうかと思われるような過激な議論をする者が多かったから、とかく世間の注目を浴びることが多かった。教会立中等学校の聖職者身分の教師は、校長の指導の下に祈禱、瞑想、労働の生活を行っていたから、世間の眼もあまり厳しくなかったし、同情的な弁護が多くみられたのである。

バンスのイエス社教団立中等学校、ルドンのユードイスト派教団立中等学校、オルレアンの司教デュパンル(Dupanloup, F. A. P., 1802-1876)が創設した教会立中等学校などの卒業生は、いずれも自己が受けた教育に感謝の念を表明している。とりわけデュパンルは伝統的カトリック教育体系の中にありながら、教育対象としての児童生徒を受動的立場に置く旧来の教育観に強く反対して、かれらの自発的活動を重視し、二〇世紀教育思想への仲介者となった。

かれの教育観によれば、われわれは児童生徒の協力なくしては、あるいは児童の意志に反しては彼らを教育することはできない。彼らは自ら教えられたいと意志するようにならなければならない。われわれは彼らをして仕事を自分から、また自分のために行うようにしなければならないのである。

また、かれの児童生徒観によれば、われわれが教える児童生徒は生命なき木石ではない。彼らは徳と真理に、知識に、愛に到達することのできるすばらしい存在である。彼らは真の意味において勢力と能力を賦与されている積極的な存在である。彼らは良心を持っている。彼らは自由である。彼らは活動し、自己発展していかなければならないというのである。

デュパントルの教育思想は、当代のフランスにおいてルソーの個人主義的ロマンティズムの教育思想とナポレオンの国家中心的画一主義教育思想を、文化と人間生活を中心としてカトリック的に止揚することにあつたと言ふことができるのである。

教会立中等学校の教育に対する批判も見ることが出来る。例えばサンチブ (Saintyves, P.) は、神学予備校 (プチ・ゼミナール) は正しい教授法や本格的な理科教育を無視していると述べている。

デュパントル校支持者は、当校の知育ではなくて「訓育」(3, 207) を批判している。かれによれば、当校はキリスト教の布教のために、多数の生徒を校舎内にすし詰めにしており、そのために生徒の精神は居眠りしてしまうようになっていく。その結果、肝心の宗教教育ですら十分に行われていないし、まともなキリスト教徒をほとんど育成して

いないというのである。

一八七一年にキリスト教学校連盟が結成された。一八八二年以後は毎年、定期教育研究大会が開催された。このキリスト教学校連盟に加わっている教会立中等学校の教育の特色は、次に示す通りである。

(一) 学校の教育方針はキリスト教のカトリック精神である。宗教教育は特別の配慮のもとに重視される。礼拝堂での教理問答指導は厳肅な雰囲気の中で実施された。カトリック教義の指導は、つねに讃美歌の斉唱によるものとされた。

(二) 教師は聖職者としての研修を行った。聖職者として身を立てるためには世俗的な誘惑は多過ぎるし、修道の志はともすればくずれやすい。それだけに神学予備校だけでなく、教会立中等学校においても、教師はつねに誘惑と戦い、強固な意志をもって聖職者としての研修が必要である。教師はたんに祭祀を厳修するだけでなく、生徒の信仰心の育成を図り、人間の力を越えた者への畏敬の念を育くむ生活へと導くことが必要である。

(三) 生徒は、復活祭の期間中は聖餐を受けることと、毎日曜日の礼拝に出席することになっていた。それでも宗教教育の成果は十分ではなかった。

キリスト教弁証篇の強化を図るために、哲学や歴史などの教科が利用された。哲学担当教師は、生徒を大学入学資格試験に準備すると同時に宗教精神の育成も図っていくことが必要であった。哲学概論の教科書は宗教教育からみて信頼しうる著書に厳選された。管理職者は学校で使用する教科書一覧表を検定した。

(四)教会立中等学校の聖職者身分の自習監督教師は、国公立中等学校の世俗者身分の自習監督教師よりも優秀であった。そのため国公立中等学校は、教会立中等学校の教科担当教師よりも自習監督教師を引き抜きたいと熱望していた。

国公立中等学校では教科担当教師と自習監督教師は同一人が兼担していた。教会立中等学校では両者は専任であり分業していた。財政さえ許せば、もちろんそれぞれが専任である方が効果は上るのである。

(四)大学入学資格試験の受験準備教育面では、国公立中等学校とまったく同じ教育課程を提供している。教会立中等学校の校長はラテン語古典教育重視の大学入学資格試験の存続に賛成していた。一八九〇年に定められた出身校内申書についても、私立と教会立の中等学校長は賛成している。

キリスト教学校連盟の加入校は、ギリシャ語・ラテン語古典、教会用語の教育を重視している。

ところが一八九〇年以後になると、学校当局者の意図に反して、近代課程中等教育の履修者がしだいに増大してきたのである。

一九〇二年のレイグ文相 (Leigues, G. 1857—1933) による古典課程中等教育と近代課程中等教育の統合措置は、近代課程中等教育部門を著しく発展させる契機となった。

国立中等学校においても、ラテン語の危機が叫ばれるようになっていた。一八八二年に専科課程中等教育大学入学資格試験が発足するとともに、国立中等学校のラテン語講読とラテン語詩文の授業では、熱心な指導を行う教師ですら、怠け者の生徒を情け容赦なしに切り捨て

ていくようになっていた。

一九〇〇年にはラテン語教育の最後の砦といわれた神学予備校さえ、「ラテン語教育の砦がくずれ始めた」(3:210)といわれるようになった。

国立中等学校におけるラテン語教育の崩壊は、必然的に国語教育の危機に連動していった。フランス中等教育界の大勢を支配する国公立中等学校でのラテン語教育と国語教育の危機的状況から私立・教会立中等学校の教育もまったく何のかかわりもないというわけにはいかなかった。

キリスト教学校連盟の教育研究大会でも、しばしばこの問題が取り上げられた。事態の改善を図るためには、高度の教養と人望のある教師を採用することが必要であるといわれた。

一九〇六年には、各司教管区は自力で教員を募集することはほとんどできなかった。教会立中等学校の前期課程教育の担当教師を養成するために、司教管区組合立師範学校の設置が必要となった。当校の卒業生は、さらに次の教育段階であるカトリック教会立神学校(アンステルダム)で一カ年履修することになっていた。この神学校では、教会立中等学校の後期課程を担当できるように、学士号取得と教育学教養の習得を図ったのである。

一八九二年の時には私立・教会立中等学校は、生徒の訓育に対して世俗者教師を雇用することに危惧の念をもっていたのであるが、それでも教師養成については世俗者教師に委託しなければならなかった。ところが一八九九年の中等学校教育調査の時には、国公立中等学校は

私立・教会立中等学校を模範としなければならないと主張する人が出てきていたのである。それゆえ二〇世紀に入るとともに、国公立中等学校長は、教師が各教科の学習指導にあたってできるだけ教育学の成果を取り入れるように要望するようになったのである。

七 私立新教育中等学校

一九世紀末期のフランスでは、新教育を提唱する一般民間人による中等学校が登場した。ドモラン (Demolin, E, 1862—1907) はモンブレのイエス社教団の学校で教育を受けた人である。かれは、『社会科学』(Le Science Sociale) という雑誌を創刊した。この雑誌は、『社会経済学者ル・プレー (Le Play, 1806—1882) の労働者世帯を主要な社会単位と考える社会改良主義の立場から、地方的小クラブから成る社会平和同盟の組織を通じて社会経済の研究を行った。とりわけ、カレは、『アングロ・サクソン民族の優秀性を形成したものは何か』という論文の中で、フランスとドイツと英国の教育制度を比較研究した。

とりわけ、かれは、英国のレディ (Reddie, C, 1858—1932) が一八八九年にダービーシャーに創設したアボッツホルム校 (Abbotsholme School) での一一歳から一八歳までの男子に対する科学的精神に基づく現代生活に適合した高尚な英国人養成のための教育を高く評価した。このアボッツホルム校の教育内容と教育方法は、後にドイツの田園家塾 (Landerziehungsheim) の原型と目されるものであり、一九二七年ま

での三八年間にわたって、レディは当校の経営に没頭したのである。

ドモランは、レディのアボッツホルム校の教育をフランスに導入しようとした。アボッツホルム校での一〇年間の教育の成果を見届けたうえで、かれは、一八九九年にベルヌイユ郊外のロシュ (Roche) にロシュ校 (Ecole des Roche) を開設した。

ドモランによれば、現実生活から遊離したラテン語教育や、実用的な訓練をとまわらない知育、とくに身体的労作をまったく欠く地理や歴史の学習は、いたずらに生徒の精神を疲労させるだけであるというのである。

それに反して、教師と生徒が一体になって、自由に、しかも力を合わせて嬉々として作業に従事するアングロ・サクソン民族による道徳教育はすぐれた成果をあげているというのである。

そのため、ロシュ校では体育が重視された。徳育では、旧教と新教の説教師の協力を得て、一人ひとりの生徒を対象とした個別指導が行われた。知育では、直観教授法が行われた。現代外国語教育では、外国語を自国語にいったん翻訳するという手順を経由しない直接教授法が行われた。理科教育では、実験観察教授法が行われた。

ドモラン自身は、アボッツホルム校のレディ校長のように直接に生徒の指導に当たるといふことをしなかった。かれは教育者としてよりも、社会学者、歴史学者として学界で活躍したのである。

ドモランのほかに、デュアメル (Duanel, J.) もフランスでの新教育中等学校の設置者である。かれは、英国の名門校であるハロー校 (Harrow) で教育を受けた後に、フランスに帰国して、ルアン郊外に

ノルマンディ校 (Collège de Normandie) を設置した。

当校の教育方針は、上級学年と哲学・文学教育ではフランスの国立中等学校を模範とし、徳育と体育による人間教育は国立中等学校でのやり方から切り離したのである。

パリ大学教授・パリ高等師範学校長ラヴィス (Lavissee, E., 1892—1922) は新教育中等学校を積極的に支援した。

これらの二校につづいて、英国人が設置したイル・ド・フランス校、エステル校、リヨン郊外の東南校が設置された。

英国のアボツホルム校の影響を受けて、ドイツに創設された田園家塾に学んだフランス人は、一九〇五年にシャル (Chalais) に田園家塾を模範としたアキテーヌ校 (Ecole d'Aquitaine) を設置した。当校は、先進校である二校よりも寄宿舎費の軽減を図って、それほど富裕でない家庭の子弟も収容できるようにしたのである。

ドモランが先鞭をつけた新教育中等学校運動は、順調に発展して行った。一九一四年の第一次世界大戦の勃発は、新教育中等学校教育活动を一時的に相当な期間にわたって停止させてしまったので、その成果を早急に評価することはできない。ロシュ校は校報も発行しており、第一次世界大戦にも生き残ることができたために、その後も新教育の実践を進めて行ったのである。

おわりに

(一) フランス中等教育の伝統的遺産であるラテン語古典教育と、国語古典、数学・理科、外国語の近代教育との対立と葛藤の問題は、フ

リ文相による専科大学入学資格試験の設置、またブルジョワ文相による近代課程中等教育大学入学試験の設置、ゴブレ文相による近代課程大学入学資格学位免状の公職への就職保障の措置によって、解決が図られたのであるが、いずれも抜本的な解決とはならず、古典中等教育と近代中等教育の統合という課題は、二〇世紀のレイグ文相の手に残されたのである。

(二) ドイツで成立し発展した実科学校が、フランスでは専科中等教育として根づくかにみえたにもかかわらず、職業教育校としては不徹底なものに終り、文理科系の一般教養教育校として伝統的な中等教育体系の中に吸収合併されていった問題については、ドイツの実科学校教育とフランスの専科中等教育を、両国の社会的、経済的、政治的な背景との関連の中で比較研究することが、今後の課題として残されたのである。

(三) フランスの私学教育は、ファル法による「教育の自由」化以来、「自由教育」(enseignement libre) と呼ばれてきたのであるが、新教育中等学校としてのロシュ校と、その母胎になった英国のアボツホルム校がどのように成立し発展していったかの問題については、両国の社会的、経済的、政治的な背景との関連の中で比較研究することが、今後の課題として残されたのである。

(四) 当代のドイツにおける教育学の成立と発展の状況と、同時代のフランスにおける教育学の成立と発展の状況を「科学社会学」的観点から比較研究することも今後の課題である。

参考文献

- (1) Liard, L., L'enseignement supérieur en France VIII, 1888.
- (2) Guyau, M., Education et hérédité.
- (3) Weill, G., Histoire de l'enseignement secondaire en France, 1921.
- (4) Riobetta, J. B., Le baccalauréat, 1937.
- (5) Parnéro, J., Histoire des institutions et des doctrines pédagogiques par les textes, 1952.
- (6) Gerbod, P., La Condition universitaire en France au XIX Siècle, 1955.
- (7) Ponteil, F., Histoire de l'enseignement en France, 1966.
- (8) Mayeur, F., Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation en France, III (1789-1930), 1981.
- (9) デュルケーム、小関藤一郎訳『フランス教育史上・下』普遍社、一九六六年
- (10) アントワース・レオン、池端次郎訳『フランス教育史』(文庫クセジュ)白水社、一九六九年
- (11) 拙著『フランス大学入学資格試験制度史』風間書房、一九八一年

【備考】文中の()内の数字は、文献番号と文献の引用頁数を示す。